

古典教育独自の機能とは何か

坂東 智子*

Re-examining the Unique Functions of Classical Education

BANDO Tomoko*

(Received September 26, 2025)

平成30年度高等学校国語の科目再編も影響して、古典学習や古典指導についての見直しが再燃している。「古典は本当に必要なのか」(2019)や、「高校に古典は本当に必要なのか」(2020)といったシンポジウムが開催され、古典教育不要を唱える否定派の主張と学習の当事者である現役高校生の声が概ね一致していることが浮き彫りとなった。そこで本稿では、改めてこれからの時代における古典教育でなければ出来ないものとは何か、古典教育独自の機能を再検討した。近年の2つのシンポジウムを対象に否定肯定派の見解を、「リテラシー」「コンテンツ」「アイデンティティ」の3観点から整理した。この3要素は、2020年のシンポジウムのディベートで用いられた論点である。戦後の代表的な古典教育論と何が異なるのか。VUCA時代に求められる古典教育独自の機能とは何かについて明らかにする。

はじめに

昭和22年『学習指導要領試案国語科編』(以下22年試案)には、中学校の国語教育は「日常の言葉からはなれないように指導することがたいせつ」であり、「古典の教育から解放されなければならない」との文言がある。

藤原(2001)は、戦時中と終戦直後の教科書(『中等国文』『中等国語』『高等国語』)における古典教材の採用に関する調査を行なった。昭和18年12月から翌年9月まで使用の『中等国文』の古文教材採用率は61.9%。昭和12年版の岩波『国語』の古文教材比率32%の約2倍である。一方、終戦直後の昭和21年版では37%に激減している。翌22年版『中等国語』16%、『高等国語』21%とさらに減少する。藤原は、「戦時中の異常に高い古文教材の割合から見れば非常な減少であるが、大正末期の数字(約20%)と比べれば決して少ない数字ではない。」という。教材採録率を見る限りにおいては「戦後も古文教材が消えることなく、中等国語教育の一角にしっかりと位置を占めていた」といえる。

古典教育の「存在意義が大きく揺らいだ」と受けとられた22年試案の言説であったが、それは「現象面・方法論における反省・批判」であり「古典教育の意義に関する本質的な批判」ではなかった。古典教育が不要とされたのではなく、戦前戦中の古典教育のあり方が批判され

否定された。つまり、終戦直後であっても、古典教育は必要だと考えられていたのである。ただし、古典教育を守ったのは「国の教育制度」であったことも忘れてはならない。

「国の教育制度」によって支えられているのは、現在の古典教育も同様である。平成30年に高等学校学習指導要領が改訂され、国語科の科目は再編された。物理よりも嫌われ、古典を学ぶ必要性への疑問の声が絶えない中で、共通必修科目「言語文化」、選択科目「古典探究」には、依然として古典教材が採録され続けている。とはいえ、古文・漢文は縮小の流れの中にある。否定派は割合の問題ではなく、学ぶべきものが多い時代に高校の古文・漢文は必修ゼロにすべきだと主張する。

本稿では、近年の2つのシンポジウムを対象に、現在の古典教育否定派、肯定派の考えを整理した。それにより、現代における古典教育独自の機能を再検討する。

1. 現状 — 高等学校国語科必修における古典の割合 —

否定派は、「高等教育において古典は必修であるべきか」に絞って論議を展開した。高等教育の限られた時間の中で、古典を学ぶ優先度は低いのではないかと問いかけ、高校古典は「必修」か「選択」かで議論された。「古典は本当に必要なのか」(シンポジウム2019年1月14日)

* 山口大学教育学部, 〒753-8513 山口市吉田1677-1, t.bando@yamaguchi-u.ac.jp

(以下本稿ではシンポ2019と記す)では、賛成派の福田氏から「われわれが受けてきた時の教育」と現在では状況が異なっている。脅威に感じるほどの古典削減現状を理解しているのか、共通理解の必要が提案された。

そこで、1章では戦後の高校国語必修科目の古典単位数の変化を確認する。表1は、仲島(2021)が整理した戦後高校国語必修科目の古典単位数である。

表1 戦後の高校国語必修科目での古典の単位数

改訂年度	国語の必修科目	単位数	うち古典	現古
昭和22年	国語	15(9)		統合
昭和26年	国語(甲)	9~10		統合
昭和31年	国語(甲)	9~10	4~5	統合
昭和35年	現代国語+古典乙I(または古典甲)	12(9)	5(2)	分離
昭和45年	現代国語+古典I甲または古典I乙	9または12	2または5	分離
昭和53年	国語I	4	2	統合
平成元年	国語I	4	2	統合
平成11年	国語表現Iまたは国語総合	2または4	0または2	統合
平成21年	国語総合	4	2	統合
平成30年	現代の国語+言語文化	4	約1.5	統合

科目として現代国語と古典が分離独立したのは、昭和35年、45年である。それ以外は、統合して必修科目に組み入れられている。科目分離した昭和35年に指導要領は試案ではなく文部省「告示」となった。昭和26年に占領軍は撤退し、経済、教育ともに「自立した日本」へ向けての動きが見られた。そういう大きな変化を背景にもつ科目分離であった。(詳細は、拙著を参照していただきたい。)

一方、国語必修の全単位数は昭和22年の15単位を頂点として、年々減少する。昭和53年には「ゆとり」ある学校生活を実現させるために年間総時間数が削減された。国語必修はここで4単位となる。また、古典は「国語I」に統合され、独立科目としての位置を失う。以降現在に至るまで古典は独立科目にはなっていない。高校必修国語も現在まで4単位に止まったままである。学ぶべきものが多い時代という問題は、古典に限ったものではない。国語全体にも他教科にも教育全体にも関係する。

ふたつのシンポジウムでは、古典縮小の現状は共通理解されたが、教科書のページ数の問題ではなくゼロにしろという否定派の要求は揺るがなかった。「高校古典必修は不要」と否定派は主張している。不要の理由とは何か。2章では2つのシンポジウムの議論を整理していく。

2. 古典教育不要論—「古典は本当に必要なのか」(シンポジウム2019年1月14日)より—

2-1 シンポジウムの趣旨

シンポジウムの企画者である明星大学の勝又基氏より、趣旨が説明された。大学の日本文学学科の縮小や指導要

領の改訂、入試改革で古典が入試から押しやられるなど、古典研究、古典教育は、四半世紀前からは想像できない状況にある。これに対して、古典の価値や研究、教育の意義を訴える言論も少なからず世に出ている。が、それらの多くは守る側の論理を一方的に振り回したものに止まっている。古典不要と考える理系、行政や産業界に肯定派の声が届いているとは言い難い。いま必要なのは、古典は不要という人の声に耳を傾け、その論理に逃げることなく向き合い、真摯に反論すること。そこでシンポの開催を企画した。勝又氏は不要論の論点を以下に整理している。

表2 勝又氏による古典不要論の論点整理

- ・あなたの人生にとって古典は必要かどうか。
- ・新たな価値がうまれている現代、古典の文法等の学びは必要なのか。
- ・大学の役割分担がすすむなか、地方国立大学に古典文学の教員は必要か。
- ・理系基礎研究者に古典の必要性を理解してもらえるか。
- ・グローバル人材を育てるといふ国の方針のもとで、日本の古典を学ぶ価値とは何なのか。

論点は、古典の価値について、高校での古典教育の内容について、大学の教員配置の問題について、理系研究者に古典の必要性を理解してもらえるか否かについて、現在の国の方針のもとでの古典を学ぶ価値についてと、古典教育に限らず多岐な領域にわたっている。これが、否定派との論争が噛み合わなかった原因のひとつではないか。後述するが、否定派は、「高校の必修に古典は必要か」に限っての論を展開した。肯定派は、高校の古典教育ではなく古典そのものの価値があるかないかの論で応答した。否定派、肯定派それぞれの主張を次に整理していく。

2-2 シンポジウムのパネリスト

シンポ2019のパネリストは、以下の5名である。否定派は、猿倉信彦氏(某指定国立大学理工系研究所教授)、前田賢一氏(元東芝OB・中央大学特任研究員)の2名。肯定派として渡部泰明氏(東京大学教授)、福田安典氏(日本女子大学教授)の2名。司会者は飯倉洋一氏(大阪大学教授)であった。

2-3 否定派① 猿倉信彦氏の発言から

猿倉氏は、高校の必修に古典は必要かということに限っての不要論であり、高校での古典は選択科目にすべきだと主張し、議論の前提として、次の2点をあげる。

まず、教育は出資者に明示的に還元される必要がある。

高校生の時間は有限で、大学では学ぶことが増えている。その科目を学ぶことで国のGDPや競争力が増し、個人としての収入増や自己実現に役立つものを優先すべき。

次に、自分が高校生の頃と現在では以下が大きく変化している。①人口減少、②国際化の進行、③日本の競争力低下。この3つの理由により、教育の能率化と女子や外国人の教育が特に大事になる。単一民族幻想、年功序列、終身雇用、男女機会不均等でも大丈夫な実質鎖国状態であった昭和から、現在は世界がつながった状態に激変している。世界標準の能力を求められる時代になった。

古典がほかの科目に時間を譲るべき理由は、国としての教育のゆとり喪失の現状があること。高校生はもっと他に役に立つ学べきことがあるという。古典を学んでも国力アップや個人の収入増に繋がらない。論理国語(企画書、発表、議論)、英語、数学がより大事である。

さらに、古典教育は年功序列や男女差別の概念の固定化を刷り込むツールになっており、有害性があるという。イノベーションが起りやすい組織において、ポリコレの障害となる可能性があるという説明している。

以上のような問題に対して、猿倉氏は具体策を提案する。古典は必修ではなく選択科目にする。触れたい人に存在は知らせることができる。また、現代語訳で国語科だけでなく社会科にも含めるという案である。コンテンツビジネス目線での伝承方法を刷新すべきと提案する。

<考察>

高校教育システム改変が閉じられた人たちだけで行なわれているという指摘は、昭和30年代にもみられた。価値を論ずるのではなく教育システムについての反対論である。年功序列や男女差別の概念の固定化を刷り込むツールに古典教育がなっているという有害性の指摘については、そういう時代や社会状況があったという事実を相対化し、現在に至るまでの経緯を知る場としての古典教育も考えられる。猿倉氏の考えは、シンポ2020での現役高校生の声と概ね一致していることは重く受け止めたい。

2-4 否定派② 前田賢一氏の発言から

前田氏は、古典は中学生までは全部習っても良いが、高校以降は芸術科目は選択制にすべきだと主張する。なぜなら、高校生の時間は有限であり、必修だと全員に必要だということ。古文・漢文はだれにとって必要なかをまず考えなければならないという理由である。

前田氏は、古典と古文の違いを次のように定義する。古典は、過去(古い時代)に表現された立派な内容。例えば、源氏物語、プリンキピアなど。古文は古典が書かれた言語。例えば、漢文、ギリシャ語、ラテン語などである。

古典は内容で判断、現代文でよいと主張する。高校以降の古文(漢文)は選択制にすべき。古文でなければわからない微妙なニュアンスは、それを知る必要がある人は限られている。古文を勉強すれば理解できるかといえば、伝わるものも伝わらないものもある。理解するとはどういうことかを明らかにすべきだと主張する。

もうひとつは、国語にはリテラシーと芸術の領域がある。その中で、最低限のリテラシーとしての正しい日本語の読み書き、理解の能力は現状では不十分。心や心情を伝える芸術(文学)と、リテラシーとしての国語を混同して教えていることが問題。日常生活にはリテラシーがより重要。複雑な内容理解、複数解釈(誤解)がないようにリテラシーをしっかりと教えてほしい。

表3 前田氏があげた具体的なリテラシー

<ul style="list-style-type: none"> ・ 論説の主張点と反対意見のまとめ方 ・ メールの書き方 ・ 会議(議事)の進め方・議論、プレゼンの方法 ・ 提案書、報告書、論文の書き方 ・ 誤解のない文章の作り方 ・ 日本語と論理を教える必要がある ・ 「AはBである」は「A=B」ではない <p>例：人間は動物である(動物は人間とは限らない)</p> <p>例：熊本県人は我慢強い</p> <p>これは、全部の熊本県人が我慢強いわけではない(熊本県人は我慢強い人が多いという意味)</p>
--

前田氏があげたものは、新設科目「現代国語」の指導内容と重なる。議論の進め方やプレゼンの方法、実的な文章の書き方など、実社会で必要とされる国語力である。「熊本県人は我慢強い」を誤解なく理解するといった力は、顔が見えないSNSのやり取りでは、今後ますます必要となるかもしれない。リテラシーをしっかりと身に付けることが、芸術としての国語より優先されるべきだというのが前田氏の主張の骨子である。

<考察>

前田氏は、原文ではなく現代文でも内容は理解できるという考えである。表現の微妙なニュアンスや語感などが伝えるものも含めた理解か、内容の理解でよいかという問題が顕在化した。国語科で最低限の言語リテラシーを保障することは必須である。日常生活で複雑な内容を理解でき、誤解がないようにすることをもってリテラシーの範囲とするのはどうか。語感や言語感覚に相当する理解の領域があることを見逃すわけにはいかない。

2-5 アンケート集計結果

①選択式、②自由記述式の調査を実施。回答総数104

名。集計結果から本稿に関係が深いものを以下に抜粋する。

2-5-1 ①ア あなたの人生に古典が役立ったことは
表4は、①アの集計結果である。(以下も同様)

表4 ①アの集計結果

ある:88 (84.61%)、わからない:10 (9.61%)、ない:
6 (5.76%)

84%以上が「役立った」ことがあると回答。2020高校生対象のアンケート結果との比較は後述する。

2-5-2 ①イ 高校の必修で古文・漢文の原文に親し
ませることは

表5 ①イの集計結果

必要:77 (74.03%)、わからない:19 (18.26%)、不
必要:6 (5.76%)、無記入:2 (1.92%)

原文か現代語訳か。原文が必要が74%。不必要は5.76%。原文派が多数を占めた。問いに「高校の必修で」とあり、必修前提での質問の仕方であることが気になる。否定派は「高校で必修」が必要なかを問うており、これについての質問がなかったのが悔やまれる。

2-5-3 ①キ 大学入試センター試験から古文・漢文
をなくせば、日本の科学、経済において、よ
り国際競争力のある人材が育成できると思
いますか？

表6 ①キの集計結果

賛成:8 (7.69%)、わからない:25 (24.03%)、反対:
69 (66.34%)、無記入:2 (1.92%)

入試から古文・漢文をなくすことに賛成か反対かを単純に問うものではない。「国際競争力」のある人材育成にとって入試から除外することが有効か否かであるため、何に反対しての回答かを判断することが難しい。

2-5-4 ①ク いわゆる「グローバル人材」に、日本
古典の素養は？

表7 ①クの集計結果

必要:86 (82.69%)、わからない:13 (12.5%)、不要:
3 (2.88%)、無記入:2 (1.92%)

2-5-5 ②ご意見・ご感想を自由にお書きください。

テーマへの関心の高さやシンポでの議論で考えが深まり明確になったと推察される記述が多かった。ただ、選択式からも分かるように参加者は賛成派が多数であった。中でも、古典教育独自の機能に言及した記述を抜粋して表8にしめた。(下線は筆者が付記)

表8 自由記述の回答からの抜粋

a 教育と研究は事情が違うので、分けた方がよいと思った。日本文化についてよく知ることはグローバル人材にとっても重要なことで、理数系の研究やプレゼンだけやれば競争力がつくわけではない。「何が幸せか」「どう生きるか」の点から選択を見直してほしい。現状から出発するのではなく、日本という背景を持つ人間として備えるべき知を体系化できるといい。

b 実用主義的観点から古典教育を不要とするなら、現代文においても文学作品などを排除して新聞などを読ませるべきだという話になるし、さらに言えば日本語ではなく英語を公用語にした方がいいという議論に行き着くのではないかと疑問である。「二流の英米人」を作る教育にいかほどの価値があるか疑問である。いまの科学技術を前提にしたプレゼン技術に果たして普遍性はあるのか、きちんと検討すべきだ。猿倉氏の言う「ビジネスのための現代人の基礎教養」というような授業を公教育で行なっている国などあるのか。そういう即役に立つ豆知識はすぐ陳腐化する。

c 古典を選択にすべき→高校において古典を学ばない人が出てくる……それは危険なのでは？中学3年では足りない(各学年1単元分しかやらないのはちょっと……)。私の中での古典は……古典というツールを通して先人の知恵を学ぶ、日本人とは歴史の中でこう変わって来たよ～という過程・歴史を学ぶと同時に、言葉を学ぶ機会を得られるチャンス。現代語訳は翻訳をした人の意思が反映されてしまっているのでプレーンな元の文も知っておくべきなのでは？日本人としてのアイデンティティーを養うためにも必要なツールだと思います。せめて1年間は古典を勉強するチャンスをあげてほしいです。(後略)

d 古典・歌における日本語のリズムを学ぶのは必修教育で重要だと思う。現代文の日本語からはそうした詞性・音楽性を身につけるのは難しいので。国語以外の科目を含めた教育再編が最終的に必要なかもしれないと思わされた。

e 日本の前近代に存在し、いまでも残っている差別や理不尽について学ぶのに日本の古典はとても良い材料になり得るはずで、差別の事実の提示を超えて、作中人物の受け止めも含めて、生徒の感受性に訴える教育の必要性を感じています。／「情緒的文章」「哲学的」「論理的文章？(国語リテラシー??)」を分別できると理系の先生方が考えておられることに驚きました。／欧米型の議論の型を前提に設計された「国語リテラシー」を生徒に教えるのは、思考の型も欧米に支配されることになるのではないかと危機感を深めています。

f 古文漢文の学習は単語・文法を学ぶことで言語そのものを客観化できる。英単語・英文法等の英語学習と併せて高校で学ぶのは大切。言語の客観化は科学的態度の第一歩。国際人というのは均一な知識を持つ人たちの集まりではない。個別の背景（お国の歴史や文化や制度）を持った人たちの集団と考えるべきで、日本人の場合は古典の知識は必須だと思われる。英国人がシェイクスピアやベーコンについて語れるのと同じ。高校生の時間不足に関していえば、リテラシーのスキルアップについては古典の学習時間をいじる必要はなく、大学の教養課程でやればよい。高校に圧力をかけすぎ。プレゼンや議論の錬成は大学でもやるべき。

g 前提として、高校教育の位置づけを明確にしておいた方が、議論のすれ違いが少なかったのではないのでしょうか。国語リテラシーの方が優先度がタカというのは同意しますが、それは中学までに行なうべきではないのでしょうか。高校は大学で専門を学ぶ前提となる基礎的知識を学ぶ場だと考えます。古典（私は平安文学に限定されない、文語文全体を指すと考えます）は、人文学に限らず、19世紀以前の資料に触れる人全員に必要です。それを大学に入ってから各学部や学科で個別に教えるのは非効率的では。また、高校でどういう人材を育てるかという議論も必要かと思ひます。エリート養成と職業教育と。戦前のように分けた方が良いのかもしれない。

h 現在の中等教育に関する政策において、“古典”は必ずしも聖域とされずに削減されている中で、否定派の主張はすでに形になっているものもあるように感じた。そのため、否定派の「ビジネスに資する」という観点から、現行の理数教育の“無駄”もあるように思われたので、その点の“自己批判”もあり得るのかは知りたかった。なお「ポリコレ」の問題は、教育のコンテンツが“不十分”であるがために生まれるような気もしているので、学校教育の全般を考えて体系化する必要があると思ひました。なので、“古典”にその原因を求めるのは逆恨みのような気もしました。

2-6 肯定派、出席者のあとがき、勝又氏のまとめから 議論で明らかになった古典教育独自の機能を整理する。

2-6-1 飯倉洋一氏（司会者）のあとがきから

飯倉氏は、不要派が「高等教育において古典は必修であるべきか」に絞って明快な論理で論陣を張り、その枠組みで、古典教育必要派が反論することは出来なかったと総括する。賛成派は、日本に暮らす以上、日本の古典は必須の教養であり、古典が必要なことは自明だという前提で議論してきた。そのため、GDPやグローバル人

材育成、ポリコレ等の視点から、要不要を考える不要派の観点は新鮮かつ有益であった。

「古典がこれまでの人生で役に立った」とか「グローバル人材の育成には古典が必要だ」というアンケートの問いに、80パーセントを超える人が、Yesと答えているところを見ると、賛成派は議論ではうまく反論できなかったが、参加者の人生に古典が、また教育に古典は必要だという感覚は揺るがなかったということである。必要派にとって、何が課題かが明らかになった。バイアスのかかっていない場でアンケートをとれば、不要派に優位な数値が出てくる可能性も高い。古典教育の現場にいる方々にはぜひこれを念頭に置いて答えを模索してほしい。

また、ポリコレを意識しつつ古典を読むことは、むしろバランスよい思想形成という観点からは、教育的な意義があると飯倉氏は考えている。単に素晴らしいと耽溺するのではなく、批判的に読む視点を育てるのではないか。

必要派も不要派も、「国語力」の大切さは、共有できる価値観である。「国語力」のレベルアップのためには「古典」が有用であることを、エビデンスを示しつつ立論できれば、不要派も納得するだろう。しかも、それが必要度において優先されるべきだということまで述べる必要がある。ディベート力・プレゼン力・あるいは英語理解力の向上にさえ、古典教育は有用であるということを示せば、この上ない。

古典はあくまで芸術科目ではなく国語科であること、そこに立脚しなければならない。「文化遺産としての古典テキスト」というエドアルド・ジェルリーニ氏（カリフォルニア大学）の発想は大いなる示唆を与えるだろう。

2-6-2 前田賢一氏（反対派）のあとがきから

「古典は本当に必要なのか」という疑問文に対して、問題は古典の内容（思想や物語など）なのか、それを記述する言語としての古文・漢文なのか、という分類から議論をしたかったと前田氏はいう。

高校生が勉強に使える時間が無限にあるのであれば、あえて反対する必要がないのかもしれない。しかし、実際には高校生が使える時間は限られており、何を優先するかということを考えざるを得ない状況にある。

まずは、普通の日本語を論理的に理解したり、自分の意見を日本語で誤解がないように主張したりできるということを優先すべきではないのであろうか。それをリテラシーという言葉で述べた。文学や言葉の美しさを問題とするものは芸術科目として扱ってほしいという意見も述べた。実際、文学は芸術である。議論は、残念ながらすれ違った部分もあったと述べている。

議論とともに、プレゼンテーションも作文も、もっと指導してもらいたい。人に理解してもらうためには、ど

のように話したり書いたりするのが良いかという内容である。

2-6-3 渡部泰明氏（賛成派）のあとがきから

渡部氏は、「個体発生は系統発生を繰り返す」という言葉が、突然耳に飛び込んできたという自身の経験を語っている。まるで韻を踏むような、あるいは俳句のような、一種詩的なその言い方に興味を惹かれ、家に帰って調べた。調べて思った。自然は、生命は、なんというロマンを開示するのだろう、と。これは文学そのものだ、とも思った。いまでもそう思っている。文学の歴史は、個人が生きる中で再生するのだ。一生もののこの一言を授けていただいただけで、十分お釣りがくる、と思っている。そして古典の授業も、生徒の心に一生刻まれる価値があるものだと思っている。

2-6-4 勝又基氏（コーディネーター） ―古典に何が突きつけられたのか―

シンポ2019のコーディネーターである勝又氏は、7項目からまとめを行なっている。そのうち古典独自の機能に関わりが大きい、「古典の優先度はどの位置がふさわしいか」と「古文を学んでも幸せになれないのか」、「古文は日本語向上に役立たないのか」の3項目を取り上げて、本シンポで明らかになった課題を整理する。

（1）古典の優先度はどの位置がふさわしいか

先述した通り、高校の単位数において古文・漢文はすでに縮小していることを、勝又氏は2018年告示「高等学校学習指導要領」を引用して丁寧に説明している。

2018年告示の指導要領では国語科の必修科目は「現代の国語」（2単位）「言語文化」（2単位）である。「現代の国語」は、「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目」である。中心となる学びは、プレゼンテーションやディベート等。近現代の小説やエッセイ、古文、漢文といった、数十年前の国語教科書に掲載されていた内容はすべて「言語文化」に入る。「言語文化」の内訳は、古典が40～45単位時間程度、近代以降の文章が20単位時間程度、と指示されている。これまで必修国語の約2分の1を占めていた古文・漢文は、今回の改訂により約3分の1まで縮小させられた。

否定派の多くは、自身が高校生だった何十年も前の苦い体験に基づいて発言していると勝又氏はいふ。国語という科目は時代とともに変化しており、これからも変化の中で古典は確実に減少していくだろう。こうした流れの中での否定かと再度問いかけを行なった。否定派はもちろん、教科書のページ数の問題ではなく、ゼロにしろと要求していると改めて主張している。

勝又氏が人文学軽視の背景としてあげたのは3点。

- A. Society 5.0：ビックデータやAIの時代に適応して、日本はすでに「役に立つ学問」に振り切った国と海外から見られていること。
- B. 日本の大学の人文学部のランキングが世界的に低い。成果が英語で書かれていないことが原因ではないか。
- C. 理系の猿倉氏が「優先度」という旗印のもと、ジャンルを超えて古典へ切り込んで来た個人的な背景の一つには、数学教育への不満があった。特に、高校数学の指導要領から行列が消えたことが危惧の契機となったのでは。

（2）古文を学んでも幸せになれないのか

シンポ2019では、否定派から「古典文法」を学んで「幸せ」になるのかという疑問が投げかけられた。これに対しての勝又氏の考察である。

① 教育が与えられる「幸せ」は何か

理系にとって「古典文法」を学ぶニーズがない。文系にとって「微分積分」を学ぶと「幸せ」になるのかも同様。これに対して勝又氏は、理系文系問わず専門的知識だけでは、生き抜いていくことは難しいと述べる。例えば、GoogleやAppleといった企業も文理融合で成り立っている。つまりは、理系文系ともに、「他者を受け入れる」ことが必要とされる。「古典の知こそ、最も受け入れが容易な『他者』である」と勝又氏は説く。「他者」を知り「他者」を受け入れ共に生きるための「古典の知」といえる。

② 科学知識や技術だけでなく文化に根差す思想が必要

勝又氏は、ノーベル化学賞学者で元・教育再生会議議長の野依良治氏のインタビューを引用している。

私は、文化は4つの要素から成ると思っています。「言語」「情緒」「論理」、そして「科学」。言語は地域によってもものすごくたくさんあり、他方で科学は一つしかない。情緒や論理の多様性は、その言語と科学の間にある。これらの文化的な要素をきちんと尊重しなきゃいけない。決して軍事力や経済力で踏みこじってはいけない。／私は科学者ですが、将来を考えると科学知識や技術だけでは、人々は生きていけないと思います。やっぱり文化に根差す思想がないと、未来を描くことも、実現することもできない。

③ 「役立つから必要」なのか、「役立たないけれど必要」なのか

勝又氏は、「役立つから必要だ」と「役立たないけれど必要だ」のどちらの説明をするのか、それぞれ「どう役

立つのか」「どう必要なのか」という答えを用意しなければならないという。これがわれわれに突きつけられた課題だとしている。

④ 高校教育は何を目指しているのか

そもそも高校教育で何を目指しているのか。議論が噛み合わなかったのは、そこが曖昧であったことが原因のひとつではないかと勝又氏は考え、高等学校国語科で新設された必修科目「言語文化」の教科目標を改めて引用している。

表9 高校国語科「言語文化」(必修)の教科目標

<p>(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。</p> <p>(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。</p> <p>(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。</p>
--

「言語文化」という科目は、国際競争力とか年収とか、そういう目先の目標を達成するために設定されたものではない。これからの望ましい社会を担う人材が言葉を通して他者や社会に関わることができるために科目としての「言語文化」が設定されていることが再確認された。

⑤ 高等学校の学びを低く見積もりすぎなのでは？

勝又氏は、高校での学びを低く見積もりすぎではないかという。微分積分も古文も、高校卒業後に使う人は多いし、使わない人もいる。別の何かを工夫している時、内向的に深く思索する時に、手掛かりになることもある。遺伝について新たな考えが紹介されれば、人間という存在に対する哲学的な認識も変わる。こうした学びを、あえて「教養」と言いたいし、高校での学びには必要なのではないかと説いている。

また、「自由度」というキーワードについては賛同できないとする。高校の必修を減らして、高校生に自由度を与えるべきだという考え方は、専門的知識にだけ詳しく他を顧みない「ギーク」や、早くから文系／理系に分けてしまう社会を生む土壌となるのではないかと危惧している。

義務教育よりもう一方高い学びを志す若者に、国が提供する学びのデザインこそ、必修科目である。そこには、

目先の利益や単なる好き嫌いを超えた、幅広い学びがあってほしいというのが勝又氏の考えである。

⑥ 古典は「我が国の一員としての責任と自覚を深める」?

安田敏朗『「国語」の近代史』は、「国語」という概念がいかに矛盾や例外をはらみながら形成されて来たかということを追跡しながら、国語が民族のもの、国家のものという概念が、必ずしも自明でないことを明らかにした。勝又氏は、高等学校の古典においても、こうした問いかけはもっとあってほしいし、古典は古い価値観を刷り込ツールではなく、むしろ、現代的な課題を解決する手掛かりになると信じるという。

(3) 古文は日本語力向上に役立たないのか

古文を学ぶことは、日本語力の向上に役に立つのかどうか、勝又氏は①から③の3つの方向からの考察を示している。

① 豊かな語彙は必要ないのか

次の二つの問題点が議論された。

- ・これからの国語に豊かな語彙は必要ないのか。
- ・古文は本当に現代語の豊かさを育むのか。

否定派の猿倉氏からは、語彙そのものを減らすべきだ、との発言があった。猿倉氏は、政策として語彙は減らすべきだ、という。これに対して、勝又氏は以下のようにいう。こうした方針は、選挙のため、ビジネスのためには良いかもしれないが、人間として文化的な生活を送るためには物足りないだろう。言葉は絶えず、そして自然に移り変わってゆくものである。言うまでもなく、日本語もこの50年間でもドラスティックに簡素化されている。アメリカも、政策として語彙を減らしたわけではあるまい。そういうものこそ自然に任せるのが良い。そしてそれは、日本人が古文を学ぶかどうか、という問題とは別のものである。

グローバル化の世の中だからといって、われわれはナショナルアイデンティティのない無色透明な人間になる必要は全くない。こういう時代だからこそ、自らのよって立つ文化に対して(肯定的にせよ批判的にせよ)意識的になることは、自然なことだと言っても良いだろう。

② 古い言葉は現代語の豊かさを育むのか

辞書編集者の飯間浩明氏は、文語文の授業は昔の日本とつながるチャンネルをもつ基礎力となるため、選択ではなく必須とするのが妥当だと主張する。その理由として、「戦前までの文章は文語文で書かれたものが多く、ちょっと古いことを調べようとすると、すぐに文語文の

知識が必要になります。自然科学でも社会科学でも、昔の日本はどうだったかを調べる機会が多いはずですが、そのための基礎知識を形成するには、文語文の授業は選択ではなく必須とするのが妥当です。古文の知識を切り捨てることは、昔の日本とつながるチャンネルを自ら断ち切ることなのである。」と説いている。

③ 今こそ現代語訳だけでは不十分

否定派の前田氏は、「現代語訳で学べば良いではないか」と主張する。また、質疑応答やアンケートの自由記述にも、「原文によるべし」という強硬な意見は少なく、現代語訳中心で、古文を参考程度に掲載する、という形式でも良いのではないかと、という意見が優勢だった。

これに対して、勝又氏は、現代語訳で済ませることに賛成ではない。なぜなら、これからの時代こそ、古文に古文の形で接することが重要だからであるという。いま古文を学ぶことによって得るべき力は、いわゆる「名作」を精緻に品詞分解し、あらすじを覚えることではない。古典へのアクセスは近年ますます容易になっているという現実がある。もちろんデジタル化の賜物である。

デジタル化により、数多くの資料（原典）に直接アクセスできるようになった。例えば明治期の読売新聞や戦時中の朝日新聞も、デジタルで読むことが可能である。国立国会図書館のデジタル化もめざましい。自分が直接、古文の世界とつながり、読むことは、多様で多大な利益を読み手にもたらす。例えば、先人の残した事跡、思索、情報、創作は、現代に生き、未来へ進むための指針となることが、しばしばある。自分で資料にアクセスできれば、自らの力で道しるべを選び取ることができる。近年、世にはフェイクニュースや歴史修正主義が台頭している。SNSの世界では、情報ソースの明らかでない歴史の「真実」が飛び交っている。こうした時代にあって、資料を自分で読み、確かめることができれば、嘘の情報に惑わされる危険が大幅に減る。実のところ現代においては、平安文学よりも、戦時中の新聞をそのまま読めることの方が、必要な古典リテラシーではないだろうか」と説明している。

<考察>

古文を現代語訳でやるか、原文かという議論の中で、「文語文」は必修でやる必要があり、それは、平安時代の文学を読むためではなく、戦前までの文語文で書かれたものを、直接原典で読む力をつけるために必要だという意見が出された。デジタル時代だからこそ、直接原典で読む力が必要で、「戦時中の新聞をそのまま読めること」の方が古典リテラシーだという考えに目を開かれた思いだ。

3. 現役高校生の視点から問い直す古典の授業—「高校に古典は本当に必要なのか 高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ」(2020) より—

3-1 シンポジウムの目的

明星大学でのシンポ2019を受けて、その場に当事者である高校生からの声がなかったことに対する疑問からシンポ2020の企画が出発した。

中学のころから古典好きだったシンポ2020の企画者である長谷川凜さんは、シンポ2019の議論に衝撃を受けたという。シンポジウムで肯定派が否定派に糾弾されている姿が衝撃的であった。それも否定派の主張が現場の高校生の気持ちとかなり重なっていた。肯定派の方々や高校の先生方に、高校生にとってはいまのままの古典の授業を続けていては駄目だと伝えたい。肯定派が否定派を説得できても、高校生に受け入れられなければ意味がないと分かってもらいたい。長谷川さんには、もっと楽しく意義の古典の授業にしてほしいという強い思いが残った。

シンポ2020の運営を担当した教員である仲島ひとみさんは、教育を受ける立場である生徒がカリキュラムの設計をできるとは必ずしも思っていないという。しかし古典教育を受ける当事者である高校生が古典教育の意義を考え、すれ違っていた議論をかみ合わせる試みをすることは大きな意味があると述べている。

3-2 高校生に実施した「こてほんアンケート」

仲島氏は、シンポ2020で実施した「こてほんアンケート」結果を次のように分析考察している。

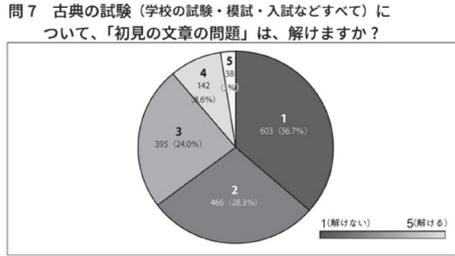
「古典が好きか」「古典の授業が好きか」といった設問に対し、ネガティブな回答のほうが多い。これは必ずしも目新しい結果ではなく、平成17年度に国立教育政策研究所が実施した高等学校教育課程実施状況調査では、古文・漢文は各科目中で最も嫌われていて（次点は化学）、「古文は好きだ」「漢文は好きだ」という設問に対していずれも7割強が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を選んでいる。今回の高校生アンケートでは、国立教育政策研究所の調査よりはポジティブな回答が多いものの、「必修科目にすべき」という答えが26%にとどまるなど、肯定派にとっては厳しい結果である。「古典を読む力」があると感じている人の少なさも気になる。

シンポ2019のアンケートでは、「高校の必修で古文・漢文の原文に親しませることは」について、必要が77.03%であった。今回の「必修科目にすべき」が26%であることから、教育を受ける当事者の高校生と指導に携わる立場との、温度差が顕著な結果として出ている。これこそが、現在の「高校での古典教育の現状、問題」

であろう。

アンケートから、古典の授業でどんな力がつのか、古典は必修にすべきか否かに関するものを取り上げる。

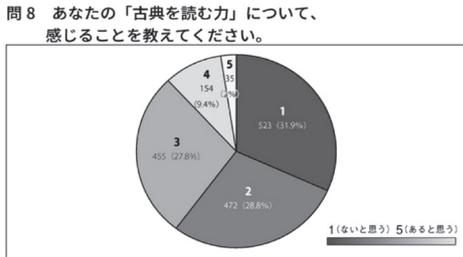
【問7】 古典の試験（学校の試験・模試・入試などすべて）について、「初見の文章の問題」は解けますか？



解けないが1位で36.7%。ほとんど解けないが2位で28.3%である。合わせて65%が初見ではほとんど解けないと回答している。

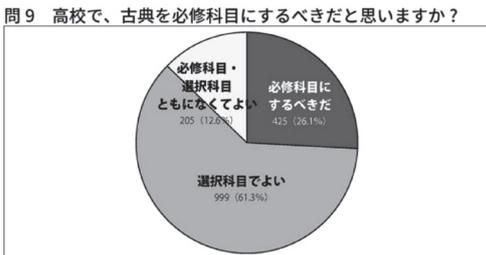
アンケートは高校10校に依頼し合計1652人から回答があった。学年では高2が半数を占め、高1が27.1%、高3が22.1%である。文系と理系の割合は半々でほぼ同じである。文系理系問わずに、古典の文章を初見で解くことには困難を感じている。

【問8】 あなたの「古典を読む力」について、感じることを教えてください。



「古典を読む力」があると確信をもって答えたのは3.5%。100人の高校生のうちの3.5人と考えると、40人の教室では平均でも1.4人。ほとんどの生徒は古典の授業を受けても、「古典を読む力」はついてないと考えていることになる。

【問9】 高校で、古典を必修科目にするべきだと思いますか？



高校で古典を必修科目にするべきだと答えた生徒は26.1%。私が予想していた比率より高い結果である。文系理系問わずに、4人に1人以上は、古典は必修科目にすべきと考えている。必修・選択科目ともなくてよいと答えたのは12.6%。予想より少ない数字であった。この結果からは、「国の教育制度」によって支えられているだけとは言い切れない面もあり、必要との考えも存在している。

3-3 3観点からの整理（仲島2020）

仲島（2020）は、図1を示し、2つのシンポジウムで出された意見を網羅しつつ、「リテラシー」「伝統の継承」「コンテンツ」の3領域に整理している。

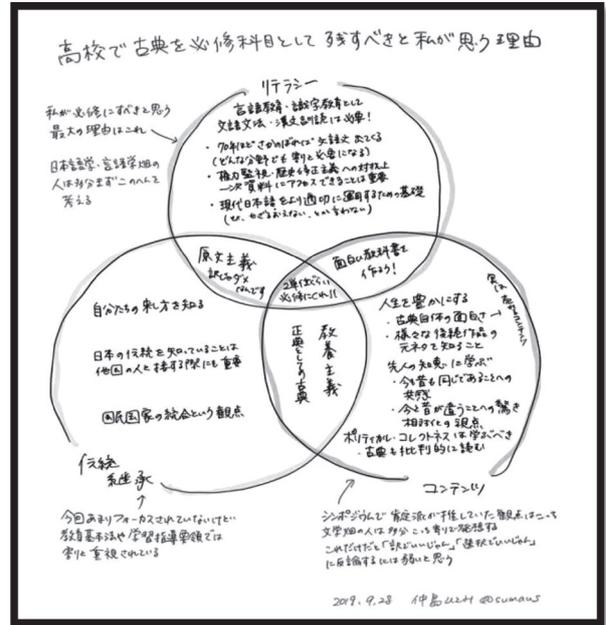


図1 高校で古典を必修科目として残すべきと私が思う理由（仲島2020）

3領域が重なる部分があり、そこが「2単位くらい必修にしてください」という仲島の主張の根拠になる部分である。現指導要領「言語文化」2単位において古文・漢文が占める割合、配分時間では2単位の3分の2程度の配当であるが、仲島はそれよりはやや増の2単位を希望している。「伝統継承」「コンテンツ」については、古典教育必要派がこれまで主張の根拠として示してきたことと重なる。それに対して、今回新しい時代に求められる古典教育の役割として、前面に打ち出されたのが「リテラシー」である。時代の変化を踏まえた主張である。仲島が図1で示したものを確認しておきたい。

表9 リテラシー領域について（仲島2020より）

<p>言語教育・識字教育として文語文法・漢文訓読は必要！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・70年ほどさかのほれば文語文出てくる (どんな分野でも割と必要になる) ・権力監視・歴史修正主義への対抗上 一次資料にアクセスできることは重要 ・現代日本語をより適切に運用するための基礎 (ex. せざるおえない、とか言わない)
--

仲島は、「日本語学・言語学畑の人は多分まずこのへんを考える」というが、今回新たな時代の流れの中でという面を重くみると、「どんな分野でも一次資料にアクセスする際に、文語文を読む力が必要になる」という点に私は最も着目した。

おわりに

昭和35年の高等学校学習指導要領国語科では、「現代国語」と「古典」が戦後はじめて科目として分離独立した。背景には、日本の国家としての独立があった。本稿をまとめる中で、現代のデジタル化という大きな流れ、変化が、教育にも生活にも直接影響していることを痛感した。科学技術の進歩による変化は、見えるものだけでなく、思考方法や内面、見えないものにまで影響する。

古典教育の文脈での大きな変化を改めて認識した。2019シンポジウムのまとめで勝又氏が、紹介した例えば明治期の読売新聞や戦時中の朝日新聞がデジタルで読むことが可能になったことや、国立国会図書館のデジタル化などにより、万を越える資料がデジタル公開されていて、閲覧もpdfダウンロードも容易に出来るようになったことである。「何の役に立つのか」と言われ続けていた文語文法、読解であるが、ここに来て一次資料にアクセスできる基礎的なリテラシーを身に付けるという役割が出てきたのである。近年、フェイクニュースや情報ソースの明らかでない情報や歴史の「真実」が飛び交っているのは確かである。こうした時代だからこそ、資料を自分で読み、確かめることができる文語文リテラシーは重要であると筆者も考えている。

文語文が読めるということは、「戦時中の新聞をそのまま読めること」である。わずか七十年ほど前の文章は、実は現代文ではなく、古典に近い、文語文で書かれているのである。

これは、戦後の古典教育論にはなかった考えだ。科学技術の発達によって、デジタル化がすすみ、世界中の人が、もちろん日本にいても、明治や大正、昭和期の新聞、その他のメディアを原文で読むことができるようになった。現代語訳をした人の眼、解釈を通さず、自分で一次資料を読むことができることは、どの分野においても必

要かつ極めて大きな意味を持つ。古文・漢文の原文に直接アクセスできるリテラシー教育としての新しい役割である。

また、ポリティカル・コレクトネス、つまり「古典に偏在する身分社会の肯定・男尊女卑の思想」等については、不要派が排除すべきと主張したが、これには筆者も首肯することはできない。「ポリコレを意識しつつ古典を読むことは、むしろバランスよい思想形成という観点」から意義がある。多様な価値観を知り、時代や社会を多様な視点からみる視座をえること、また現在に対しても批判的な視点で捉えることにも寄与するものである。

今回の再検討によって、デジタル化時代における、第一次資料に直接アクセスし、資料を読むことができるリテラシーの育成のための文語文教育の意義が明確になった。

もちろん、古典の教材選択や授業方法については、見直し改善を継続して行なっていく必要がある。

引用文献

国立教育研究所内戦後教育改革資料研究会編：文部省「昭和三十二年（試案）学習 指導要領 国語科編」『『文部省学習指導要領全21巻 2国語科編（1）』、日本図書センター、3、1980。

藤原マリ子：「古典教育の意義に関する考察」、『早稲田大学大学院教育学研究科 紀要』別冊8号-2、38、2001。
明星大学日本文化学科：シンポジウム「古典はほんとうに必要なのか」、仲島ひとみ [編]：高校に古典は本当に必要なのか 高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ、文学通信、2020。

坂東智子：「高等学校における「現代国語」創設の意義」、山口大学教育学部、研究論叢、人文科学・社会科学64（1）、139-150、2015。「学校教育のなかでの古典（1960年前後）」、山口大学教育学部、研究論叢、人文科学・社会科学65、59-65、2015。

<注>

* 1 ポリコレ (political correctness) とは、社会的な差別や偏見を避け、全ての人が平等に扱われるべきであるという考え方を指す言葉である。「実用日本語表現辞典」より。<https://www.weblio.jp/content/ポリコレ>。